

ヴァージニア・ウルフ著『三ギニー』に見る平和主義と「暴力の文化」への考察
——男達の“fear”と女達の“fear”——

奥 本 京 子

**Pacifism in Virginia Woolf's *Three Guineas* and Thoughts on the “Culture of Violence”:
“Fear” in Men and “Fear” in Women**

Kyoko Okumoto

抄 録

30年代に著された『三ギニー』におけるヴァージニア・ウルフの平和主義とは、フェミニズムを基盤にしたものであった。家庭内の性差別から始まり、その構造的・文化的暴力が、そのまま独裁政治体制に発展しているということが、ウルフの発見であった。男達とは違い、女達は“outsider”として、社会・世界の「暴力の文化」に立ち向かい、立場は違えども共に「平和の文化」構築を目指す、という点において、この書は、同様に暴力に満ちた緊張度の高い我々の時代においても、再読する必要があると確信するものである。

キーワード：『三ギニー』、ヴァージニア・ウルフ、平和主義、フェミニズム、「暴力の文化」
(2002年9月12日 受理)

Abstract

The pacifism in Virginia Woolf's *Three Guineas* written in the thirties developed from her feminism. Woolf's discovery was that Structural and Cultural Violence, bred in sexism at home, was leading to the system of dictatorships in Europe at the time. Woolf insists that being in a different position from men, women, as “outsiders”, must eliminate the Culture of Violence in the society and the world. However, she believes that women and men must create “the Culture of Peace” together, and this is why we, in our violent and nervous world today, should read the text once more.

Key words: *Three Guineas*, Virginia Woolf, pacifism, feminism, the “Culture of Violence”
(Received September 12, 2002)

<最初に>

西暦2001年、「現在」を生きる誰もが忘れられない衝撃的な年である。新世紀初めの年であり、新千年紀が始まって間もない年。そして、9・11及び10・7事件の起こった年。2001年に、『三ギニー(原題 *Three Guineas*)』の新版(編者 Naomi Black)が、The Shakespeare Head Press Edition によって出版され、¹ 翌年にその書評が書かれ、² 国際ヴァージニア・ウルフ協会のニューズレターで特集され、³ オン・ライン・テキストも入手できるという。2001年に『三ギニー』の新版が出たというのは、単なる偶然かも知れないが、9・11及び10・7事件が起こったその年以降、立て続けに、出版されたり議論されたりしているという事実、そして現在ここにその書が存在する事実を、今、我々がどう考えていくべきか。⁴ 今一度、それを再考することの意義は何なのかを考えるために、フェミニズムと相俟って、ウルフの平和主義は、『三ギニー』において、どのような展開をしてきたのかを分析する。本稿は、その展開の中で、実は、フェミニズムに対する男達の“fear”こそが、平和主義に対するニヒリズムを生み出すという形で、平和に対する妨害という名の暴力に連結しているという事実を再認識するものである。ウルフはそこに“fear”を持つのであって、故に、彼女が平和主義を堅固に実践する必然性を明らかにしていきたい。また同時に、長い間様々な形態の暴力に脅かされてきた女達の“fear”を通して、これらの“fear”の文化が相互的に「暴力の文化」を形作ってきた我々の歴史を問うことにする。ウルフのフェミニスト平和主義は、そのような「暴力の文化」を「平和の文化」に転換させようという主張を持って、訴えかけてくるものがあるのではないだろうか。

<ウルフを取り巻く時代と環境——30年代におけるウルフの思考の方向性について>

『三ギニー』が執筆されたのは30年代(1931-8年)である。当時のウルフを取り巻く時代・環境について知ることにより、作品の理解につなげたい。30年代に突入するまでのあいだ、ウルフは夫 Leonard とともに、様々な政治的活動に身を投じていく。Wayne K. Chapman と Janet M. Manson によるとファシズムが台頭してくる30年代が始まる前に、すでにレナードと共にウルフは、高まりをみせていた平和主義運動の中でも大きな存在だったという。弟の Adrian Stephen、義弟の Clive Bell、そして Lytton Strachey、Duncan Grant、David Garnett などの友人達は皆、良心的兵役拒否者であったし、夫は the Fabian Society や the League of Nations Society の中心的メンバーであった。そのような夫の活動を通して、第一次大戦中、ウルフは、英国の外交議論の真中に位置していたと言える。また、夫は、労働党のリーダーによって設立された the Union of Democratic Control (U. D. C.) という団体のメンバーでもあった。1916年10月から、the Peace Committee of the Society of Friends の主催の会議において、U. D. C. のメンバー、Charles R. Buxton、Bertrand Russell、Arthur Ponsonby、G. L. Dickinson、Hobson や、連合の支持者である Hugh Richardson や Henry Hodgkin と共に、武力行使に関する合法性・非合法性について議論し、平和主義的な論を主張したり、1917年には様々な論文を発表したりしていて、ウルフも夫の秘書的役割を果たしている(4-5)。

Henry R. Winklerによると、社会主義的な方針を掲げていた労働党は、第一次大戦後の約半世紀の間、英国の外交に対し唯一かなり力を持っていた重要要素であり、当時は広く普及していた平和主義を、具現化し言語化することにより、強い影響力を持ったという(249)。上段落に述べたように、夫もウルフ自身も社会主義的、あるいは平和主義的な運動の渦中に身を投じていくことになるわけだが、Michele Barrettが論じているように、ウルフ自身は、「資本」が心理的なダメージを与えるという社会主義的な考えを持っていたにも関わらず、夫は「財産」は価値ある政治的目的のために活用すべきだと論じていた。そして、結局のところ、『自分だけの部屋(原題*A Room of One's Own*)』を1929年に執筆するにあたってウルフは考えを多少改める。“...she had decided as a feminist to prioritize the specific needs of (middle-class) women over the more general (socialist) desirability of abolishing capitalism”(xxi)。社会主義的・平和主義的環境の中に影響を受けたウルフは、何よりもまず、フェミニストとして現状打開を願っていたものと考えられる。

今更言及するまでもなく、ウルフは、女性の地位向上のため精力的に活動していたわけであるが、ウルフにとっての最優先課題であるフェミニズムが、徐々に積極的に、平和主義思想と調合されていくのは、30年代の事であった。ブラックの解説によると、30年代前半においては未だ、女性への抑圧システムと戦争システムとが関連付けられるに至っていなかったウルフのフェミニズムが(xxii)、時代の流れと共にそれらの因果関係を分析するに至ったのは、30年代半ば(1935年)であった(xxv)。時のヨーロッパの独裁者 Benito Mussolini や Adolf Hitler のスピーチ(30年代半ば)が、その一つのきっかけであったようだ。以下に引用するのは、ウルフ自身が『三ギニー』の中で引用しているヒトラーのスピーチである。

There we have in embryo the creature, Dictator as we call him when he is Italian or German, who believes that he has the right whether given by God, Nature, sex or race is immaterial, to dictate to other human beings how they shall live; what they shall do. Let us quote again: “Homes are the real places of the women who are now compelling men to be idle. It is time to Government insisted upon employers giving work to more men, thus enabling them to marry the women they cannot now approach.” Place beside it another quotation: “There are two worlds in the life of the nation, the world of men and the world of women. Nature has done well to entrust the man with the care of his family and the nation. The woman’s world is her family, her husband, her children, and her home’.” (50)⁵

このヒトラーのスピーチ(1936年)は、性差別こそが悪政の根底にあるのだと、ウルフを確信させる。また、『三ギニー』の中で重ねてその関係性を繰り返すことで、ウルフの信念が強調される仕組みになっている。“There are so many versions and all are so much alike that it seems unnecessary to verify each separately”(161)⁶ と、上記の類の男達の発言について述べ、社会・世界全体の構造の中に、また、文化の中に組み込まれている性差別に言及する。

ブラックによれば、ウルフは大戦間に独裁主義反対組織に入っていたという (xxvi)。ブラックは、『三ギニー』は、ウルフの feminism であり、“a radical rejection of much of the society she lived in” (lxiii) であるという。そのフェミニズムは、つまるところ、家庭内の性差別の構造が、そのまま海外の独裁主義を構築しているという現実突き当たるのだった。ヨーロッパの独裁体制が日に日に増強され、ウルフの暮らす英国にもその影が忍び込んでくる。MacGregor Knox によると、すでに20年代の中頃には、例えばムッソリーニは大英帝国の破壊を企て、英国はそれに対抗するために地中海のジブラルタルやスエズを護衛し、イタリアの食糧や原料調達に抑制をかけていたという。英国本土以外の地域の英国領を含め、ヨーロッパ全体を不穏な空気が流れていたわけである (19)。Martin Ceadel が、“the three-fold crisis of 1935-6 in which Mussolini attacked Abyssinia, Hitler remilitarized the Rhineland, and Franco launched the Spanish Civil War” (139-40) と説明するように、特に35年から36年にかけて、ムッソリーニ、ヒトラー、そしてフランコによる一連の独裁体制による暴力が続くのだった。それに加え、甥の Julian Bell の戦死 (1937年) は、ウルフの家族に強烈な衝撃を与えた。ウルフは、平和主義の家庭で育った彼 (バレット xl) が、どうして敢えて戦争に行かなければならなかったのか、と問いながら、自分は言葉を手段にして、不公正と戦うのだという決心をするのであった (xxix)。

＜フェミニズムに裏打ちされたウルフの平和主義について——男達の “fear” とウルフの “fear” を通して見る「暴力」から「平和」への転換＞

ブラックによると、60年代に始まった米国のフェミニズム第二波の『三ギニー』受容については、最初は、男性とは異なった女性自身の経験に価値を見出そうとしているため、“androgyny/equality” (バレット xliv) 的見解を主張する『自分だけの部屋』(1929年)ほどには歓迎されなかった『三ギニー』(1938年)も、次第にその存在を肯定的な形で認められるようになる。ブラックは、グリーンナムコモンの女たちや、⁷ 1991年の湾岸戦争を例に挙げ、その受容がウルフより後の時代にとっても妥当な提言であるという。また、80年代のフェミニストにとっては、社会変革の鍵を担う思想として受け継がれていく (liii-iv)。確かに、現代の平和教育者・平和学者であるフェミニストの Betty Reardon は、1985年に『性差別と戦争システム』⁸ を著して、結果的にウルフの信念を受け継いでいる。ブラックやバレットが解説するように、ウルフのフェミニズムの特徴としては、『自分だけの部屋』では、androgyny とか equality 等に焦点があたっており、『三ギニー』においては、男女の違いに焦点があたっていると議論されることが多いようである。だが、『自分だけの部屋』で強調された点が、実際に急を要する社会変革——独裁体制が原因で起ころうとしている戦争の予防——のために、応用するがために視野を広げたところで、平和主義的国際理解へと結びついたので、『自分だけの部屋』の続編とも言われる『三ギニー』であると解釈できよう。

Alex Zwerdling は、ウルフのフェミニズムを “anger” と “conciliation” が混合したものであるとして分析している。“Anger is treated as embarrassing and childish; at best it

only provides some interesting raw material for the artist to refine and contain” (69). 時代は、「怒り」を全面的に表現するのは「はしたない」こととし、抑圧することを良しとするということだったのだろう。彼女が書くものが、“anger”と“conciliation”の間で揺れ動いているのは、そういったウルフの生きた時代のせいであるという。その時代について、ズワードリングは、解説を続ける。“The whole literary climate of Woolf’s time, then, fostered the kind of detached, controlled, impersonal aesthetic theory she adopted” (70). しかし、同時に Mary Wollstonecraft から始まって、19世紀のフェミニストの書き物に当然親しんでいたウルフは、Emily Davies、Anna Jemima Clough、Josephine Butler、Octavia Hill、Sophia Jex-Blake らから引用したり、Millicent Fawcett や the Pankhursts らの婦人参政権運動にも関わっていた。そのため、様々な形態の彼女らの“anger”の政治的表現に親しんでいたはずである (71)。その中でほとんどのフェミニストたちは、結局のところ「力」のある男性の目を覚ますことが不可欠であると気付いており、“conciliatory gestures” (73) を駆使し、男性がフェミニズムに対して拒否反応を示すことにより運動が妨害されることを抑止しようとしたのである。ズワードリングは、次のように分析する。

All such assurances were designed to speak directly to **men’s fears**—that the feminist movement would produce and alarming new kind of woman, indifferent to domestic duty, competitive with men, ‘unsexed,’ ‘unfeminine,’ masterful rather than submissive.” (73、太字は筆者)

これらのフェミニスト達は、自立した女性が男性の「敵」に豹変することはない、と力説したのである。以上のような要素を背景に、ウルフの書き物の中には、抑圧せずに表現したいという気持ちと、そうでない(文学の伝統に影響を受けた)気持ちが同居している (73-4)。芸術作品とは、“Anger could be the root, but must not be the flower” (74). と信じていたウルフは皮肉や風刺で怒りを間接的に表現することも多かった。

さらにズワードリングの説を借用して、“anger”と“conciliation”が上記のごとく混合するウルフのフェミニズムについて認識を深めてみたい。

When the men in her circle discuss the futility of pacifism, the inevitability of war, she becomes firmly convinced of the need to examine their attitudes from her own detached point of view. What had begun as **a helpless fear of male authority** had gradually turned into a skeptical and highly critical perspective on it. (79、太字は筆者)

ウルフの“fear”は、その独自の方法で客観的に、平和主義に懐疑的である男達が、その考察を如何に展開するのを見極めようとするのである。フェミニズムを堅持しながら、「平和」という価値を追求するためにウルフは邁進していくのであった。ウルフはその途中において、男達のフェミニズムに対する“fear”に気づき、それが結果として平和主義を妨害する要素として発展していくことに対し“fear”を持つのであった。しかし同時に、ウルフは実権を掌握しているのは男性であり、彼らを敵にまわすのは、得策ではないと考え、“So she invents the well-meaning male correspondent who writes asking her how war

might be prevented—a symbolic figure designed to represent the confused, liberal, established men with feminist sympathies who are the audience she most needs to reach” (80). とあるように、人格的にも社会的意識という点においても「見込みのある」男性像をつくりだし、その人物に向かって語るということを、『三ギニー』の中で実行しようとしたわけである。

そういった特質を持つウルフのフェミニズムは、男達の世界にある多様な問題点に切り込んでいく。そしてその問題点こそが、社会の構造的な暴力に発展しているのだと指摘する。作品の中で、ウルフは人間らしい生活を送ることのできない男達について言及する。(66-7)。“professional men” (66) は、猛烈な仕事人間であるがゆえに大きな「犠牲」を払っているのだという。例えば、睡眠不足の法律家、芸術を鑑賞する時間もない政治家、精神的に崩壊寸前の状態の宗教家、仕事と報酬に囚われた奴隷に近い状態だと嘆く医者、言葉を吐き出すように大量の仕事をこなすジャーナリスト等の姿を通して、“professional life” (68) の価値—“its spiritual, its moral, its intellectual value” (68) —が本当にあるのだろうか、という疑問が、読者の中に湧いてくる仕掛けである。そしてさらに議論を展開していく。

They make us of the opinion that if people are highly successful in their professions they lose their senses. Sight goes.... Speech goes.... Humanity goes.... Health goes....

“That of course is a figure, and fanciful; but that it has some connection with figures that are statistical and not fanciful—with the three hundred millions spent upon arms—seems possible.... (68)

ここでは、男達が、人間としての重要素である感覚の数々を徐々に失っていつているのではないかと、ウルフは指摘している。そして、感覚的なものには留まらず、具体的な結果を招いていると、もう一步踏み込んで、分析している。男達の彩りのない無機質な生活様式こそが社会というものを構成しているわけであるから、その男達の「無感覚」の帰結するところが、暴力を肯定する社会であり、つまるところ、構造的暴力の究極の形のひとつである軍事費の、具体的な統計・数字に辿り着くつくというわけである。平和主義に関してシニカルな男達に対する“fear”がウルフの中に生まれ、それが、軍事体制という社会現象を分析した結果である。

では、実際に『三ギニー』における、フェミニズムに基盤をもつウルフの平和主義とは、一体どういうものなのか。ウルフは、イングランドにおける女達の地位について辛辣に弁を振るう。イングランドは彼女らにとってアイデンティティの根源ではない、というのだ。

When he says, as history proves that he has said, and may say again, “I am fighting to protect our country” and thus seeks to rouse her patriotic emotion, she will ask herself, “what does ‘our country’ mean to me an outsider?” To decide this she will analyse the meaning of patriotism in her own case. She will inform herself of the position of her sex and her class in the past. She will inform herself of the amount of land, wealth and property in the possession of her own sex and class in the present—

how much of “England” in fact belongs to her. From the same sources she will inform herself of the legal protection which the law has given her in the past and not gives her. And if he adds that he is fighting to protect her body, she will reflect upon the degree of physical protection that she now enjoys when the words “Air Raid Precaution” are written on blank walls. (98)

さらにウルフは続ける。男達が、「兄弟」意識や家父長的な権力、国益のために何か行動を起こすというが、女達にはそういったモチベーションはない、と。イングランドに義理がない彼女らは“by human sympathy” (99) という形でのみ行動することができるのだ。

And if he says that he is fighting to protect England from foreign rule, she will reflect that for her there are no ‘foreigners,’ since by law she becomes a foreigner if she marries a foreigner. And she will do her best to make this a fact, not by forced fraternity, but by human sympathy. All these facts will convince her reason (to put it in a nutshell) that her sex and class has very little to thank England for in the past; not much to thank England for in the present; while the security of her person in the future is highly dubious. (98-9)

そして、ここではっきりとウルフは断言する。女達は、家父長制によって塗り固められた国家意識や戦争・暴力システムには、参加しないし是認しえないのだ、と。女達はあくまでも、その“outsider”としての使命をまっとうするのだ、と。“...the outsider will say, ‘in fact, as a woman, I have no country. As a woman I want no country. As a woman my country is the whole world’” (99). これがウルフのフェミニズム的平和主義であり、さらにいうならば、人類愛であると理解してよいだろう。『三ギニー』の最後を締めくくるにあたり、ウルフが記したのは、“A common interest unites us; it is one world, one life” (130). であった。「いのち」を守るという目標に向かって、女達と男達のアプローチの仕方は歴史的・伝統的・社会的に違えども、共に突き進むのだという彼女の人間的な温かさが感じられると思う。それは、男達の“fear”に配慮しながらも、自身の“fear”に誠実に対処した結果、ウルフの平和主義が生まれてきたともいえるだろう。

<最後に——ウルフの目からみた「暴力の文化」と我々の現在について——女達の“fear”を通して>

では、ウルフの平和主義的視点からみると、「暴力」の問題はどう捉えられるのか。『三ギニー』新版に対する Alison Light の書評は、全体の最初の一割弱を、現代表面化しつつあるトピックであるドメスティック・バイオレンス、体罰、暴力的な言語表現、「いじめ文化」の中での価値観等の問題の例を通して、“fear”の文化についての説明に割いている (29)。「暴力」を美化し、英雄崇拜する心理的作用は、我々の文化が奨励してきたものであり、また反対に文化がそういう要素によって構築されてきたともいえる。暴力の文化は、恐れているから発言できない、行動できない、予防できない、という恐怖 (“fear”) の文化でもあり、長年にわたって女性を黙らせてきたし、平和主義を拡大しようとする動

きに歯止めをかけてきたわけである。「文化的暴力 (Cultural Violence)」⁹ と、それが構造化された「構造的暴力 (Structural Violence)」は、世界のあちこちに未だ蔓延っている。フェミニスト研究者であるブラックは、“Woolf’s feminism in *Three Guineas* is remarkable in its implications for a broader critique of all systems of oppression” (xliii). と主張するが、まさしくこれは、平和学的に読み換えると、構造的暴力についての問題提起である。

「文化」の位置付けは、伝統芸能、文学、舞踊、演劇、習慣・しきたりというような明確・直接的なものと、さらに、もっと広義の社会の「土壌」や「風土」とでも言い換えられるようなものとし、国連総会決議で1999年9月13日に「平和の文化に関する宣言」の中で定められたように、「価値観、態度、行動の伝統や様式、あるいは生き方のひとまとまりのもの」(平和の文化をきずく会、11) であると確認したい。¹⁰ また、ジョン・トムリンソンは『文化帝国主義』の中で、19世紀のイギリス人類学者、E. B. タイラーを引き合いに出し、「文化とは、…知識、信念、芸術、法律、風習など、社会の一員としての人間が習得した、あらゆる能力や習慣を含む複合体である。」(19) といい、「人間の生活がひとつの「全体性」として経験されるという認識を反映する」(19)、また、「ひとつの集合体の「生き方」を記述するために、ひとつの体系的な概念を提供してくれる」(19) と説明している。そして、こういう考え方はユネスコで文化政策に携わっている委員たちが、認識するところであり、生活そのものを指すこともあるとも述べている。

さて、ウルフは、『三ギニー』の中で、自国に対する “some ‘patriotic’ emotion” (99) についてや、他国に対して “the intellectual superiority” (99) を感じることに、大いに皮肉を混ぜながら、“insider” ならそう感じるかもしれないが、“outsider” としての女達はそのような感覚は持ち合わせていないと述べる。そこで登場するのが、“painting” であったり、“music” や “literature” であったりするのだが、他文化に対して、自文化が勝っているとかどうか、そんなことは瑣末な議論である、というニュアンスを込めているように思われる。そういった文化論などには目もくれず、『三ギニー』では広義の「文化」論を築き上げているとも言えるのではないか。性差別が起こっているのは、“atmosphere” (50) のせいである、とウルフは確信する。

Atmosphere plainly is a very mighty power. Atmosphere not only changes the sizes and shapes of thing; it affects solid bodies, like salaries, which might have been thought impervious to atmosphere.... atmosphere is one of the most powerful, partly because it is one of the most impalpable, of the enemies with which the daughters of educated men have to fight. (50)

構造的・文化的暴力を生み出してきた体制側の「文化」を非難しつつ、家父長制に犯されていない「文化」を求めているのが『三ギニー』の平和主義である。

フェミニスト的に解釈すると、男達の “fear” とは先述のように、女達が「自立しすぎて家庭を顧みない」ことだったり、「女々しい」と評されることだったり、暴力を否定することが「男らしくない」とされるということだったりするでしょう。また、そのような “fear” の感覚から派生し、さらに平和に対するニヒリズムに展開するなら (それはまさにウルフ

自身が男達の中に嗅ぎ取ったことであった)、それは「平和の文化」創造の妨害である。では、女達が“fear”の感覚をもつのは、何であったのか。ウルフが言うように、男達は社会の“insider”として、また、女達は“outsider”として、異なる立場に位置しているが、同じ社会の文化を共有している。ウルフのフェミニズムに基盤を持つ平和主義が、「暴力の文化」を解析するとき、明確にしておくべきは、その文化の中で培養された“fear”とは、“insider”に大きく作用するはずであるが、“outsider”にとっては実は自らの抱える問題ではないのである。

しかし、果たしてそれは、女達はその「暴力の文化」を内包する社会から痛みを受けなかったということにはならない。ブラックは、白人女性も社会システムから利益を得ていたこともあると認めた上で、次のように分析する。

In the last years of the twentieth century, the complexities of women's relationship to imperialism became a significant feature of radical feminist analyses... but imperialism also added to the burdens of sexism even for them, for it provided yet another justification for hierarchy. *Three Guineas* is prescient about such issues. When Virginia Woolf challenges the value of British 'civilization', she tells women to compare 'the testimony of the ruled—the Indians or the Irish, say'—with the claims made by their rulers (3G99). (xliv)

ウルフは、男達の、女達の、そして自身の“fear”を通し、それらを包含する土壌であるところの「暴力の文化」全体を問うているのである。“fear”の文化、つまり、「暴力の文化」に生き、脅かされてきた女達はその犠牲者ではあったが、今や“outsider”として、男達とは異なるアプローチによって、「平和」つまり「生命の尊重」という究極の目的に向かおうと呼びかけるのである。

30年代という時代は、緊張が高まっていく時代であった。夫レナードが、10年代中頃から政治的活動、国際外交への発言を活発にしていくのに比べ、レナード言うところの“the least political animal that has lived since Aristotle invented the definition”（ブラック、xlvi）であった彼女は、あまり直接的に政治的なものに関わるようなタイプでなかったのかも知れない。しかし状況は、その様な人間でさえもが、無視できない緊迫した時代であった。我々の生きる現在も、同様に、誰もが状況を直視せざるをえないところまで来ている「緊張」があるのではないか。¹¹ そんな中、『三ギニー』の提言を今一度、再考する価値があるものと信じる。

Anna Snaithによると、ヒトラーが1939年3月にプラハを侵攻すると、世論は戦争を支持し始めたという。30年代後半、ヨーロッパの緊張度がさらに増すにつれて、the Bloomsbury circleのメンバーの中にも、独裁制と戦うためには武力を行使する必要がある、と、平和主義を放棄する者が増えた（バレット、xl）。しかし、Maren Linettの次の説明に注目したい。

“Woolf also felt pressured by Leonard and many of their Labour Party Friends and acquaintances to abandon her pacifism and “sign on” by supporting England's

rearmament. Especially after 1935 Leonard's views "hardened," differing significantly from her own. In 1936 she aligned herself with Aldous Huxley, a pacifist who had refused to sign a manifesto that supported sanctions against Italy. As England coalesced into an antifascist militarized bloc that itself threatened free imagination. Woolf did not yield to the pressure to support military solutions; but she did decide to expand the ways in which her fiction engaged with the sociopolitical world." (348)

夫レナードを始めとし、周囲が硬化するなかで、ウルフは敢えて、表現者としての自由を守るため、平和主義に徹したのであった。

9・11及び10・7事件以降、同様に、「平和主義の看板を降ろす人が相次いでいる」¹²という記事が記載されているが、これは、ウルフの時代と同様の現象であり、なんら驚くに値しないことだろう。さらにここで使われている「平和主義」が何を指すのか、また、30年代に同様に切り捨てられた類の“pacifism”も、何であるのか明白にする必要があるだろう。ここで指摘される平和主義とは、理論と実践に基づいた信念あるそれでは、最初からありえなかったのではなからうか。30年代のウルフを取り巻く状況と現在の日本の状況とは、この点でも似通っている。¹³つまり、この現象が導き出す答のひとつは、平和主義の真の価値と実効性がまさに問われている時代であるということなのである。日本の「平和ボケ」の危機が叫ばれるようになって久しいが、文化の危機、という意味においても、日本に暮らす我々は、新版『三ギニー』をどう読むのか。一般的に、地域紛争などを含めて、世界が多様な危機に瀕していることを鑑みると同時に、我々が暮らすこの日本という場所について思うとき、第二次世界大戦後の日本の有り様、また、米国に追随する日本の諸政策の危険性を、実感し、文化の危機を他人事では済ませられないという事実におち当たる。今、『三ギニー』が我々に問い直していることをしっかりと受け止めたいと思う。

注

- 1 Woolf, Virginia. *Three Guineas*. Ed. Naomi Black. Oxford: Blackwell, 2001. 本稿でウルフの『三ギニー』からの引用は、すべてこの新版からとする。
- 2 Light, Alison. "Harnessed to a Shark." *London Review of Books* 21 March (2002): 29-31.
- 3 International Virginia Woolf Society. *Virginia Woolf Miscellany* 60 (2002): 1-7. その中で、『三ギニー』と9・11事件や平和主義について言及されている。
- 4 9・11&10・7事件以後の状況と我々の現在地点について、また、ウルフが『三ギニー』に取り組んでいた30年代ヨーロッパと現在の「グローバル」な社会・世界状況の類似・相違点について、そして、現在『三ギニー』を再読することの意義については、拙論の書評（日本ヴァージニア・ウルフ協会、『ヴァージニア・ウルフ研究』第19号）を参照のこと。
- 5 『三ギニー』の第二章に引用されている。
- 6 『三ギニー』の第三章のための、ウルフ自身の注釈18番から引用。
- 7 イギリスのグリーンナムコモン（Greenham Common）軍事基地において、80～90年代、核ミサイルの配備を阻止することを目的に女性ばかりで平和キャンプをはるなどの行動が盛んであった。
- 8 Reardon, Betty. *Sexism and the War System*. New York and London: Teachers College, Columbia University, 1985.
- 9 ガルトゥング・ヨハン 『構造的暴力と平和』 高柳先男、塩屋保、酒井由美子訳 東京 中央大学出版部 1991。

- 10 さらに定義等の詳細は、平和の文化をきずく会編 『暴力の文化から平和の文化へ—21世紀への国連・ユネスコ提言』東京 平和文化 2000。参照のこと。
- 11 詳細は拙論の書評（日本ヴァージニア・ウルフ協会、『ヴァージニア・ウルフ研究』第19号）を参照のこと。
- 12 内藤泰朗 「現代米利堅考—9・11がもたらしたもの—再考を迫られる『平和主義』」『産経新聞』2002年8月30日 朝刊 16面。
- 13 他の類似点・相違点については、拙論の書評（日本ヴァージニア・ウルフ協会、『ヴァージニア・ウルフ研究』第19号）を参照のこと。

引用文献

- Barrett, Michele. Introduction. *A Room of One's Own/Three Guineas*. By Virginia Woolf. Ed. Michele Barrett. London: Penguin Books, 1993. ix–liii.
- Black, Naomi. Introduction. *Three Guineas*. By Virginia Woolf. Ed. Naomi Black. Oxford: Blackwell, 2001. xiii–lxxv.
- Ceadel, Martin. “A Legitimate Peace Movement: The Case of Interwar Britain, 1918–1945.” *Challenge to Mars: Essays on Pacifism from 1918 to 1945*. Eds. Peter Brock and Thomas P. Sochnat. Toronto: University of Toronto Press Inc., 1999. 134–48.
- Chapman, Wayne K. and Janet M. Manson. Preface. *Leonard and Virginia Woolf Working Together and the hitherto unpublished manuscript 'Inl Rens'*. By Virginia Woolf. Eds. Wayne K. Chapman and Janet M. Manson. London: Cecil Woolf Publishers, 1997. 3–8.
- 平和の文化をきずく会編 『暴力の文化から平和の文化へ—21世紀への国連・ユネスコ提言』東京 平和文化 2000。
- Knox, MacGregor. “Conquest, Foreign and Domestic, in Fascist Italy and Nazi Germany.” *The Journal of Modern History* 56 (1984): 1–57.
- Light, Alison. “Harnessed to a Shark.” *London Review of Books* 21 March (2002): 29–31.
- Linett, Maren. “The Jew in the Bath: Imperiled Imagination in Woolf's *The Years*.” *Modern Fiction Studies*. 48. 2 (2002) 341–61.
- 内藤泰朗 「現代米利堅考—9・11がもたらしたもの—再考を迫られる『平和主義』」『産経新聞』2002年8月30日 朝刊 16面。
- Snaith, Anna. *Virginia Woolf: Public and Private Negotiations*. New York: Palgrave, 2000.
- トムリンソン・ジョン 『文化帝国主義』片岡信訳 東京 青土社 1997。
- Winkler, Henry R. “The Emergence of a Labor Foreign Policy in Great Britain, 1918–1929.” *The Journal of Modern History* 28–3 (1956): 247–258.
- Woolf, Virginia. *Three Guineas*. Ed. Naomi Black. Oxford: Blackwell, 2001.
- Zwerdling, Alex. “Anger and Conciliation in Woolf's Feminism.” *Representations*. 0–3 (1983): 68–89.